

氏 名	ゴ ン ドウ アツ コ 権 堂 敦 子
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	論 博 音 第 1 0 号
学位授与年月日	平 成 25年 9 月 30日
学位論文等題目	〈論文〉唱歌教育期における高野辰之の音楽観 —日本の音楽と教育との接点をめぐって—
学 力 審 査 委 員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (音楽学部) 佐 野 靖
(副査)	〃 准教授 ( 〃 ) 山 下 薫 子
	〃 教 授 ( 〃 ) 塚 原 康 子
	〃 〃 ( 〃 ) 杉 本 和 寛
	〃 准教授 ( 〃 ) 佐 美 真 理
論 文 審 査 委 員	
(主査)	東京芸術大学 教 授 (音楽学部) 佐 野 靖
(副査)	〃 准教授 ( 〃 ) 山 下 薫 子
	〃 教 授 ( 〃 ) 塚 原 康 子
	〃 〃 ( 〃 ) 杉 本 和 寛

## (論文内容の要旨)

本研究は、音楽教育史研究の視点から高野辰之（1876-1947）の音楽観を検証し、日本の音楽に対する高野の視座の独自性とその意義を明らかにすることを目的とする。

高野の業績は広範にわたり、これまで総合的に捉えられていないため、本研究では、まず、高野の視座の背景を詳細に記述する。つづいて、その背景をふまえ、唱歌教育期における日本の音楽の状況と高野の言説を照らし合わせ、高野の音楽観を検討する。そのうえで、うたの本来的なあり方を根底に据えた高野と唱歌教育の方向性との乖離を明らかにし、最後に、日本の音楽と教育との接点をめぐる高野の視座の独自性と意義を考察し、現代の音楽教育への示唆について述べる。

高野は、研究方法が十分に確立していない時代に実証的な歌謡史・演劇史研究に取り組み、近代をより俯瞰的に捉え、その学問的な知見をふまえて日本の音楽文化と向き合った。また、明治後期から昭和初期におよぶ約30年間にわたって、一方で文部省における国定教科書の編纂、他方で東京音楽学校における邦楽調査掛の業務を担当し、国民教育と専門教育の最前線にあった。いいかえれば、近代における国家的な施策、初等教育、音楽文化のいずれの側面とも接点をもち、学校教育および音楽文化にかかわる政策決定の場に近接した位置で職責を全うした人物である。本研究では、高野が、学問的な研究をふまえつつ、人と音楽との根源的なかわりに対する独自の視座を形成してきた点に注目し、音楽教育史研究の立場からその視座を考察することとした。

高野の研究歴を時系列で確認していくと、作歌や国文学研究での攻究が日本の音楽の歴史的展開を遡り、広がり、深まりながら、資料集成の編纂や通史の執筆へと展開され、日本の音楽や初等教育、子どもやうたのありように対する主張へと結びついている。その基盤となる視座は、一方で、言語学・国文学・国語学研究や、国語政策においてめざましい展開がなされた明治30年代に築かれ、近代国家にふさわしい「国語」、初等教育における教科としての「国語」のあり方の模索を目の当たりにするなかで形成された。他方で、国文学研究者として浄瑠璃本の整理に携わり、文部行政の担当者として童話伝説俗謡

等の全国調査を担当するなかで、書き留められた詞章がその命脈を保ち、湮滅に瀕しながらも人々によって音や動きを伴うそれぞれ固有の実体として上演されていることを確認している。そのことは、日本の音楽文化にかかわる国内唯一の官立高等教育機関における立場での視座と、俗謡調査等から感じ取った人々の生活文化への視座、加えて、近代学校制度における初等教育、子どもの音楽文化への視座へと結びついたと考えられる。

本研究の結論として、高野の音楽観とその独自性を整理すると以下のとおりである。

まず、歌謡史において、外来の音楽文化の模倣・同化・融和の過程を必然として捉える。そのうえで、新しく取り込まれる西洋音楽も、時好に投じて流行し変化する大衆音楽もそこに含め、日本の音楽全体を邦楽と捉えた。その根底には、音楽は常に変化することによって展開するものであるという認識が存在する。固定した伝統音楽として古典化することよりも、新しい外来の音楽文化を取り込みながら、流派の別を超え、変化し続ける生命力を重視したのである。

その一方で、外来の音楽文化の同化、融和の過程においてその転換点を支えてきたのは、上層階級ではなく、民衆の生活文化における音楽であるとする。技巧歌の対極として民謡を位置づけ、巧拙、雅俗にとらわれることなく、だれもが自在に自らの思いを口にでき、模倣し、歌い変えながら伝わることを重視した。民謡の一部をなすわらべうたも、子どもが理屈なしに耳を傾け、模し、熟し、振り捨てることのできるものとし、そのうたが、子どもがいかたくていえなかったことを伝えていれば作者は問わない。わらべうたとして流布し、伝承の過程で語句やフシも淘汰され、そこに一定の句の形や曲調が存在している点に着目する。

そのうえで、高野は、近代学校制度とともに生まれた唱歌について、元来音曲の基礎となるべきところ、日本在来の音楽に対して耳を塞いできたとして批判する。高野が唱歌に期待していたのは、これまでに淘汰されながら伝わってきた日本在来の音楽の特徴を備え、童心童語からなり、子どもが自ら自分の思いを歌いだせるようなうたであった。日本の芸術音楽と民謡の両者をつなぐ役割を唱歌に期待していたといえる。しかし、唱歌教育は西洋音楽を基礎とし、規範性を重視する方向をたどり、高野の考える子どもの表現のありようとは相入れないものであった。

高野の音楽観は、学校教育における子どもの生活と芸術文化の連続、非連続の問題への示唆を内包するものであり、教育課程における日本の音楽の位置づけが問われる現在において、改めて検討される必要があると考える。

#### (学力審査結果の要旨)

審査会においては、まず、外国語（英語）の学力をみるために、英語文献の翻訳業績や過去の論文の要旨について審査を行った。その結果、音楽教育のみならず、認知心理学等の分野にまたがった英語文献の訳文からは、英語の高い読解力、平明な日本語に訳する能力等を十二分に有していることが明らかとなった。また、論文の英文要旨からも、それらが学術的な英文として妥当なものであることが認められた。さらに、申請論文の作成においては、明治・大正期等の数多くの文書資料を読み解く能力が求められるが、この点も申請論文の学術性から判断して申し分ない。申請論文とは直接結びつかない研究論文等の内容からも、相応の学力をもつものと判断できる。

以上を踏まえて、論文博士の学位を授与するにふさわしい学力を有するものと判断し、合格とする。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文「唱歌教育期における高野辰之の音楽観—日本の音楽と教育との接点をめぐって—」は、高野辰之の音楽観を音楽教育史研究の視点から検証し、日本の音楽に対する高野の視座の独自性と意義を明

らかにしたものである。高野は、音楽専門教育の最前線である東京音楽学校に勤務しつつ、邦楽調査掛の事業で中心的役割を果たし、文部省の唱歌教材作成にも国語教育の系譜に位置づく立場で深くかかわっていた。また、歌謡史・演劇史研究においては実証的な成果をあげ、将来の音楽文化に対して貴重な提言を行い、さらには、民衆の歌謡に対する独自の視点をもっていた人物である。

本論文は三部から構成されている。第一部「高野辰之の業績をその背景」では、高野の言説等を手掛かりに、高野の研究歴を時系列で整理し直し、国文学・国語とのかかわりから、邦楽調査掛の事業や国定教科書の作成などを通して、浄瑠璃研究から歌謡史・演劇史研究へと広がる高野の足跡を明らかにした。第二部「高野辰之の邦楽観」では、明治40年代から昭和10年代を中心に当時の音楽状況をふまえながら、高野の業績に通底する邦楽観を抽出し、その独自性を明らかにした。音楽は常に変化し続けるものであるという認識に基づく高野は、邦楽の各種目に対して、新しい外来の音楽文化を同化しながら変化し続ける生命力を求めた。さらに、一般大衆が思いにまかせて歌える「民謡」が新しい邦楽を生み出すと考えていた高野は、そうしたうたが対比的な「技巧歌」とも相互影響的にかかわり合いながら、時代に合った音楽に形を変えていくという独自の見通しをもっていたのである。高野の邦楽観をふまえた第三部「高野辰之における日本の音楽と学校教育との接点」では、子どもの表現や学校教育のありように対する高野の主張が検証された。日本の芸術音楽と民謡の両者をつなぐ役割を唱歌に期待していた高野は、民謡の一部として高野が位置づけたわらべうたと、唱歌教育期のわらべうた教材とが乖離してしまったこと、唱歌が日本在来の音楽に対して耳を塞いできたこと、唱歌教育が西洋音楽を基礎とし、規範性を重視したことなどを批判する。そして、高野のこのような見解は、現代の音楽科教育において日本の音楽の位置づけを考えていく上で大きな示唆を与えるというのが、申請者の主張である。

本論文の学術的成果は、第一に、膨大な資料と先行研究を多角的に分析することを通して、高野の全体像を具体的に描き出したことである。時系列に丹念に研究歴等をとらえ直すことによって、高野の視座の形成過程を明らかにすることにも成功している。しかも資料の中には、高野の日記や論文、諸記録など、これまであまり知られていなかった貴重な資料が含まれており、資料性という面でも価値の高い論文となっている。第二に、音楽教育史研究の視点から考察を行い、高野の邦楽観・音楽観を明確に示したことである。本論文は、言うまでもなく単なる人物研究ではない。その背景には、今日の音楽科教育における「我が国の音楽文化」のとらえ方に対する強い問題意識が存在する。邦楽を相互影響的、流動的に変化するものととらえ、さらに、生活文化の音楽と芸術音楽の両者を結びつける回路として唱歌や童謡を位置づけようとした高野の視座に、今日の日本の音楽と学校との接点をとらえ直す手掛かりを求めたところに、音楽教育学の博士論文としての価値がある。

ただし、若干の課題は残されている。高野の音楽観がやや抽象的なレベルに留まっている感は否めないし、高野の音楽に関する言説の信頼性にも問題があろう。文章表現の重複が目立つ点や結論部の記述の仕方についてはなお改善の余地がある。

とは言え、厚みのある論述で新たな高野辰之像を描き出し、日本の音楽に対する高野の視座の独自性と意義を、今日の音楽教育学の課題にまで引きつけて論じた本論文は、論文博士の学位に値する優れた内容であると判断し、合格とする。